

外来化学療法に薬学的知見をもって介入できた一例

タイヘイ薬局 A コープ店 西阪宏彰

【目的】

昨今、高度化するがん医療の進歩に伴い、薬剤師の専門性を活かした質の高い安全な医療を提供する社会的要請に応えるためにがん専門薬剤師を養成することが行われている。胃がん患者のレジメンや検査値等確認し、より質の高いがん治療に貢献できた症例を報告する。

【症例】

60 歳代男性 p StageIV スキルス胃がんと診断された患者。開腹幽門側胃切除術施行され、その後術後補助化学療法としてテガフル/ギメラシル/オテラシルカリウム(以下 S1 と表記)28 日投与 14 日休薬で治療中であった。その後、多量の腹水が出現し、入院となる。退院後 S1+cisplatin(以下 CDDP と表記)での治療が開始となったが、好中球減少と腎機能低下で中止となった。

【介入結果】

S1 単剤での治療開始時の腎機能は CCr69.2ml/min であったが、S1+CDDP へ移行する際の腎機能は CCr49ml/min と低下していた。腎障害のある患者では、フルオロウラシルの異化代謝阻害剤のギメラシルの腎排泄が低下するため腎機能により投与量の調節が必要である。S1 の投与量は 120mg/D であったため、CDDP を追加することを考慮し、2 段階減量を提案した。S1 は 80mg/D へ減量され、S1+CDDP が施行された。また、本患者は S1 単剤療法中に涙流が見られた。角膜障害による涙液分泌更新や涙道障害による涙液排泄低下が疑われているとの報告があるため、人工涙液により wash out を行うことが推奨されている旨、主治医と病院薬剤師へ情報提供をし、ヒアルロン酸点眼液 0.1% が追加された。

【考察】

S1 単剤での術後化学療法後に、S1+CDDP が開始されたが、ガイドラインでは術後補助化学療法施行中または終了後早期(6 か月以内)再発例に対する化学療法は術後補助化学療法で用いられた同じ薬剤を用いないことを推奨するとされている。補助化学療法施行中または終了後早期(6 か月以内)再発例は術後化学療法が 1 次治療として取り扱われることがあり、早期再発と判断した場合は補助化学療法で使用した抗がん剤は再発例のレジメンとしては使用しない。本症例は再発したが、早期再発ではなく、S1 が効果ありと判断され、再発に対する 1 次治療の推奨レジメンが選択されたのだと考えられた。本症例では、検査値やレジメンを確認することで S1+CDDP 療法の適正使用に貢献できた。また主治医と病院薬剤師へ情報提供することにより、化学療法の副作用に早期に対応することができた。外来がん化学療法が増えていく中で、外来化学療法を安全に施行できるように知識・技能を習得し、地域がん医療において患者とその家族をサポートしていきたい。